

1. 研究の背景

申請者（野津）はNPO法人「ママの働き方応援隊」と協働し、2017年度より、神戸市子ども家庭局の「若者の結婚出産応援事業」を受託し、神戸市内の10数大学で「赤ちゃん先生クラス」を実施してきた。この研究は、その発展をめざし、下の①②を目的とした。

①2020年度ユニティ共同研究班『赤ちゃん先生クラス』を活用した新たな学生キャリア教育の開発を実施したが、この研究はそれをさらに効果的な大学生向けのキャリア教育として発展させるために、クラスの実施効果を分析し、新たなクラス実施モデルを開発する。

②2020年度ユニティ共同研究班によって、キャリア（結婚・出産・育児）に対する学生意識のジェンダー格差が部分的に解明できたので、さらにその格差を総合的に分析し、格差解消のためのクラス内容を開発する。

2. 研究実績・成果

①調査クラス開催の実績（2022年度実施分）

	女性	男性	総計
神戸市内6大学で開催 参加学生の総計	91	28	119

②2023年2月22日（水）

「イエナプランから見た赤ちゃん先生クラス」というテーマで、ZOOMによるオンラインで成果発表会を実施した。

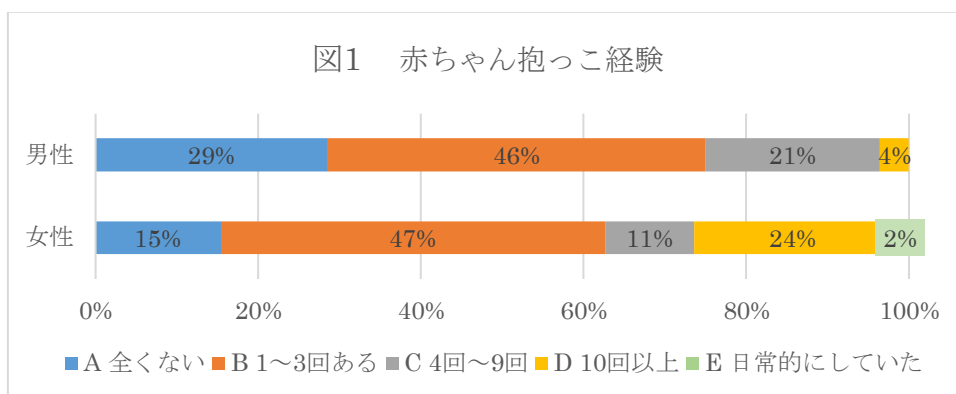
参加者は兵庫県稲美町「ころあい自然楽校」の指導者を含め、全国の子育て中の母親など約50名だった。

③研究成果：事前・事後アンケートの結果（一部抜粋）

クラス参加の学生にクラス開催前と開催後にアンケート調査を行った。以下は男子学生と女子学生を比較したジェンダー格差の分析の一部である。

(1)「赤ちゃん抱っこ経験」の男女差

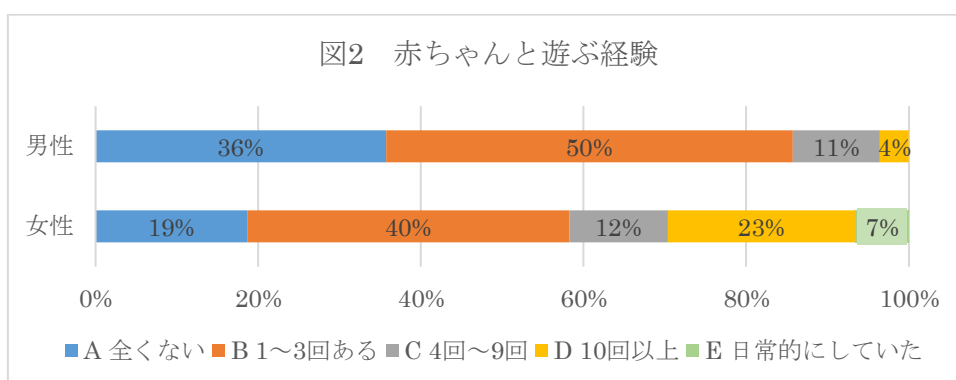
事前調査では、学生に「高校卒業までに体験した赤ちゃんとの交流」を聞いた。その結果、「赤ちゃん抱っこ経験」には、男性の29%、女性の15%が「まったくない」と回答した。全体に男性は、抱っこ体験がないか、あってもきわめて少ないことが分かる（図1）。



(2) 「赤ちゃんと遊ぶ経験」

「赤ちゃんと遊ぶ経験」も、(1)と同様に**男性の36%**が「まったくない」と回答している。また男性は、「赤ちゃんと遊ぶ経験」が「10回以上」は4%しかなく、「日常的にしていた」は0%である。男性は赤ちゃんとの遊ぶ経験がきわめて少ないことが分かる(図2)。

(1)(2)より、赤ちゃん先生クラスが男子学生たちの貴重な赤ちゃん体験機会となったと言える。

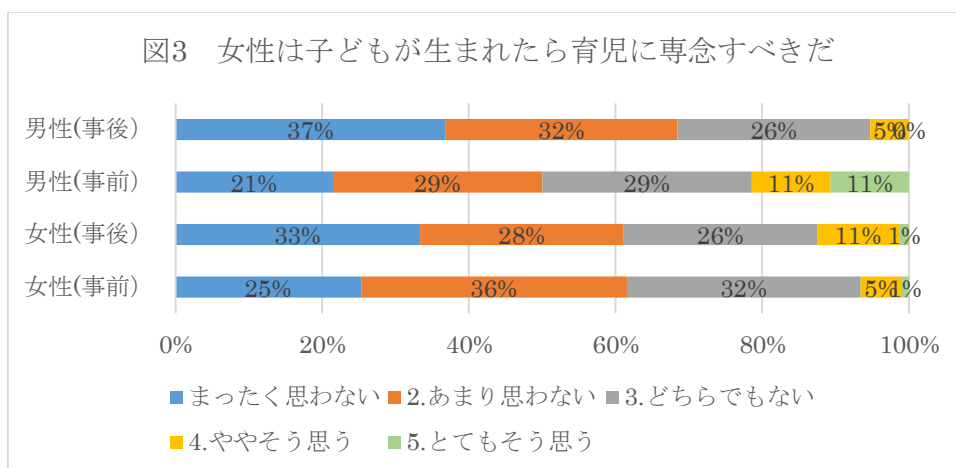


(3) 育児意識の変化

「女性は子どもが生まれたら育児に専念すべきだ」という質問への回答を事前と事後で比較した(図3)。

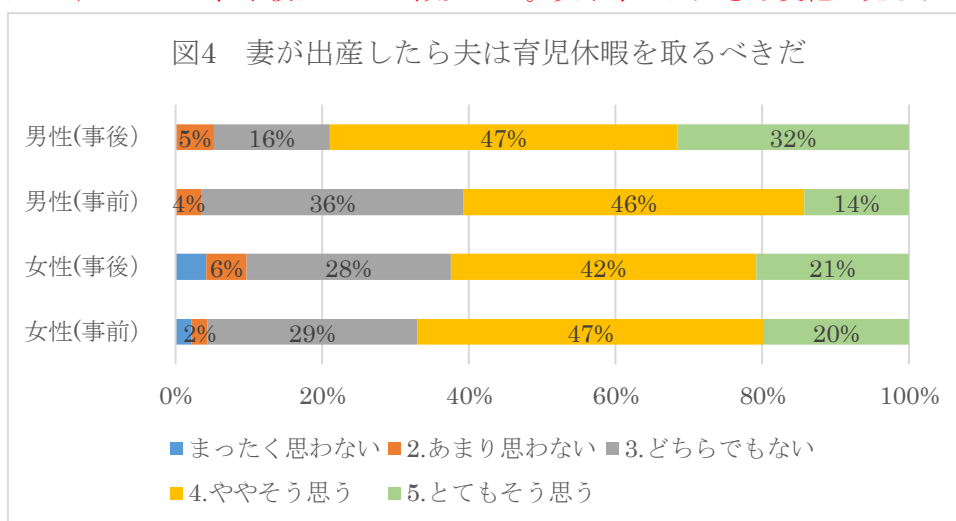
男性で大きな変化が見られる。「とてもそう思う」「ややそう思う」を合計すると、事前では22%だったが、事後は5%に大きく減った。逆に「まったく思わない」「あまり思わない」を合計すると事前では50%だったが、事後は69%に増加した。**男性は、赤ちゃん先生を通して、育児中の母親の話を聞き、育児に対して関心を持ち、ポジティブな印象に変わったことが分かる。**

女性は大きな変化は見られない。



(4) 育児休暇への意識変化

「妻が出産したら夫は育児休暇を取るべきだ」という質問への回答を事前と事後で比較した(図4)。男性では大きな変化が見られる。「とてもそう思う」「ややそう思う」を合計すると事前では60%だったが、事後は79%まで大きく増加した。逆に「どちらでもない」は、事前では36%だったが、事後は16%に減少した。女子学生は大きな変化は見られない。



3. 今後の展望

調査より、女子学生以上に男子学生に赤ちゃん先生クラス参加の効果が分かった。男子学生たちは赤ちゃん先生クラス参加で、母親たちの子育ての実情やパートナーの育児への関わりを直接聞いて、それまでの固定的な考えが変化し、育児に参加する事への関心を深め、育児休暇を取ることの重要性を理解したと考えられる。また、赤ちゃん先生クラスは、男子学生が経験の乏しかった赤ちゃんと直接接する機会にもなっている。

今後は、(1)男子学生が一層、赤ちゃん先生クラスに参加するように開催大学に働きかけること、(2)男子学生に一層効果のある赤ちゃん先生のプログラムを開発することを関係者と検討していきたい。